

CQ62 「胎動回数減少」を主訴に受診した妊婦に対しては？*Answer*

1. 胎動回数と胎児健康の関係について問われた場合「関連があるとする研究報告もある」と答える。(C)
2. 「胎動回数減少」を主訴に受診した妊婦に対しては胎児 well-being を評価する。(B)

▷ 解 説

胎動減少は胎児機能不全の一徴候である可能性があり、胎動減少・消失が胎児死亡に先立つ事例が相当数報告されている。初期の研究によれば、胎児奇形のない単胎妊婦 120 人のうち胎動感正常は 108 人で、このうち未熟性により 1 名が死亡し 107 人は健常であったのに対して、胎動感減少・消失は 12 人で、うち 4 人が死亡し他の 5 人も緊急帝王切開になった¹⁾。ローリスク症例を対象にした研究で、胎動減少のみを主訴に来院した妊婦 292 人のうち、1.7% は来院時に児は死亡しており、4.4% は急速遂娩を要し、5.8% では non-reassuring FHR でフォローが必要とされた²⁾。ハイリスク妊婦 264 人を対象にした研究でも胎動減少・消失群では児死亡・罹病率が有意に高値だった(46% vs. 1.3%)³⁾。しかし、妊婦に胎動回数をカウントさせ胎動減少時に来院させる方策が周産期死亡を実際に減少させるか否かについてはまだ結論が出ていない。胎動数カウントを導入する前・後の児 outcome 比較研究では、カウント導入前には児死亡が 8.7/1,000 であったものが導入後には 2.1/1,000 にまで減少し、胎動数カウントには周産期死亡率減少効果ありと結論された⁴⁾。一方、胎動自覚カウントは児死亡率低下には貢献しない、とのデータもある⁵⁾。68,000 人以上の妊婦が 2 群に分けられ、一方は「formal」な胎動カウントを指示され、他方は「informal」に胎動について尋ねられるだけだった。周産期死亡率は両群では差がなかった⁶⁾。胎動数減少を主訴に受診した症例の多くは受診時に既に児は死亡していた⁵⁾。以上、胎動減少・消失が胎児死亡に先行する症例は存在するが、胎動カウントが周産期死亡を減少させるとの明確なエビデンスはないので Answer 1 のように記載した。

胎動数カウントには 2 法がある。ある一定時間内に感じられた胎動数を記載させる方法¹⁾³⁾と 10 回の胎動を感じるのに要した時間を記録させる方法(10 回胎動カウント法: count to ten)^{4)~6)}とである。後者は妊婦への時間的負担が少ない。胎動 10 回カウントに要する平均時間は妊娠末期で 20.9±18.1 分(mean±SD)⁴⁾と報告されている。最近の日本人妊婦を対象にした研究では、「1 日のうちで胎動が最も激しい時間帯に測定した場合」の 10 回カウント必要時間は妊娠末期で平均 14.8 分であり、その 90 パーセンタイル値は約 35 分であった⁶⁾。死亡の前兆ではなくて児の quiet phase が胎動数減少と認識されてしまう可能性もあり、胎動 10 回カウント何分以上での申告を指導すべきかについてのコンセンサスはない。「胎動が急に弱くなった場合」には申告するように、と母親学級などで妊婦に指示しておくのも一法かもしれない。

胎動減少・消失が胎児死亡に先立つ事例が相当数報告されていることから、胎動減少・消失感を主訴に受診した妊婦には胎児 well-being 評価が勧められる。評価法に関しては、NST、血流計測、羊水量計測、biophysical profile score(BPP)、CST などが考えられるが⁷⁾、どの評価方法が優れているかについての RCT はない。児 well-being 評価で異常がないが胎動減少感が続く場合に、入院監視すべきかどうかについてはコンセンサスが得られていない。CST 後に分娩誘発を考慮するとの指針もあるが⁷⁾、この方策が良いかどうかの検証はなされていない。